

クヌギ

虫に人生を捧げたくて行き着いた

昆虫林業で

循環里山経営

菅原亮 (宮崎県美郷町・菅原昆虫店)

昆虫が集まり、シイタケも育つ

かつて宮崎県の山間部はカシなどの常緑照葉樹が広がる山林で、炭焼きやシイタケ栽培が盛んに行なわれておりました。しかし戦後の政策によりスギなどの針葉樹の植樹が進められ、今では7割以上の山林がスギ林へと変わっています。それ



クヌギ(栲)

ブナ科コナラ属の落葉高木。葉は長楕円形で周囲には鋭い鋸歯が並ぶ。薄い葉だが硬く、表面にはつやがある。新緑と秋の黄葉が美しい。実は他のブナ科の樹木の実とともにドングリと呼ばれる。直径が約2cmと大きく、ほぼ球形。また、幹から樹液がしみ出ることがあり、カブトムシやクワガタなどの甲虫類や、チョウ、オオスズメバチなどの昆虫が集まる。生長が早い木で、伐採しても切り株から萌芽更新し、里山の樹木の一つとして薪やシイタケのホダ木などに利用されてきた。

幹と葉の写真=編集部

と並行して生物の多様性は失われ、シカなどの獣害も深刻化しています。

新潟県出身の私が、ここ宮崎県美郷町の渡川どがわに家族5人で移住したのが4年前。高齢化と後継者不足により放置されたクヌギ林をお借りして少しずつ手入れをしています。クヌギは、昆虫の集まる木であり原木シイタケの材料になる木。昆虫

との共存・共栄をテーマに昆虫目線の林業をスタートさせました。クヌギ林を活かしてシイタケを栽培しながら、ネットショップ菅原昆虫店を経営しています。いま風に言えばSDGsや分散型ビジネスなどと形容されることもありませんが、本人としては、ただ単に昆虫のために人生を捧げたくて今に行き着いた、といっ



2mほどの高さで伐採した「台場クヌギ」。手を伸ばせば地上からでもチェーンソーで切れる。伐採のたびに残す「台場」の内部はしだいに腐朽して、その枯れた空洞がクワガタにとって恰好の産卵床になる



筆者

た感じですよ。

「昆虫博士」といわれた幼少期

幼少の頃の私は絵に書いたような虚弱体質。アレルギー性の喘息や鼻炎でろくに運動もできない子供でした。思い出すのは、市営団地の薄暗い天井を布団の中で眺めながら咳き込んでいる苦しい記憶。そんな何とも切ない幼少期でしたが、週末になると、市街地から車で15分ほど走った所にある祖父母の家へ預けられるチャンスがやって来るのです。

そこは海沿いの集落で、西に日本海と砂浜が広がり、東には田畑を挟んで鉄道が走り、100mほど先には低い山がある自然豊かなところでした。私は、野良仕事をする祖父の後ろをついて歩き、海へ行けばカニを採り、畑ではチョウを採り、ありとあらゆる生き物を採って遊んでいました。すると不思議なもので、あれほど苦しかった喘息がなぜかその時だけは治まり、体だけでなく心までもすっきりしているような感覚が幼心に感じ取れたのです。これが、今もなお私の根幹を成す原体験になっているのだろうと思います。

虫が喜ぶ、シカ害がない

台場クヌギの里山づくり

宮崎へ来る前は、新潟のキノコ工場で働いておりました。菌床栽培という方法で、現在私が行なっている原木露地栽培と違って工場の建物内での仕事です。

ここに移住してお借りした山は、当初は雑木だらけの鬱蒼としたジャングルでしたが、下刈り、除伐、間伐を3年間実施し、10mほど間隔をとってクヌギが立っている状態にしています。去年、念願の自然発生のカブトムシを見ることができました。日当たり、風通しがよくなり、草花が生えチョウなども飛んでくるようになりました。

伐採も皆伐はせず、原木シイタケに適した太さに育ったものだけをランダムに切って使用しています。また、かつて戦



ノコギリクワガタ